

小口登良教授を偲んで

専修大学商学部教授 大林 守

小口登良先生は2010年（平成22年）2月19日午後3時50分に急逝されました。長期国内研究員として研究中に体調をくずされ入院、いったんは退院なさり、2009年夏には退院祝いを新宿の中国料理屋で行い、共同研究の打ち合わせもしました。しかし、その後、再度入院され治療後は病院で車いす生活をされていました。見た目にはいたってお元気のご様子でした。亡くなる4日前にお見舞いに行った時は、車いすに慣れようと廊下で練習していらっしやいました。そして、退屈しのぎにと持っていった数冊の小説を選別されているときに偶然主治医が来られたおりには、皆で医療ミステリー小説の話題で会話が盛り上がったほどでした。

先生は、諏訪清陵高等学校を卒業後、国際基督教大学教養学部を卒業、さらに同大学行政学大学院修士課程終了、米国ニューヨーク州立大学大学院バッファロー校で博士課程修了（Ph.D.）、そしてカナダ・オンタリオ州ウィンザー大学経済学部の助教授として教育研究生活を始められました。ニューヨーク州立大学では先生の成績が良かったので、日本人学生が入学しやすくなり、後に日本人の経済学博士が何人も生まれました。バッファローはナイアガラ瀑布の近くで、上流はカナダのトロントになります。中華料理を食べにトロントの中華街によく行かれた話を聞いたことがあります。カナダとの縁はこの頃からあったのでしょうか。ウィンザー大学時代に母校である国際基督教大学の客員教授として帰国され、その後は筑波大学社会工学系に移られました。

先生と初めてお会いしたのは筆者が国際基督教大学の専任助手として働きながら留学準備をしている時で、米国留学のみを考えていた自分の目をカナダに向けていただき、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学博士課程への留学に結びつきました。まさに筆者にとって導きの人であり、メンターでした。

商学部の小口先生をお迎えするにいたった背景には、平成初期の商学部における経済学教育の充実化があります。従来、必修であった経済原論の講義は完全に経済学部

教員に依存していました。筆者の入職により商学部教員による経済学教育が始まりましたが、当時の総勢 1200 人を超える規模の経済原論の履修生を 1 名の教員が負担するには無理があり、増員人事が認められることになりました。そこで、先生に筑波大学出身の候補者の紹介を依頼したところ、思いがけなくご本人から専修大学に移っても良いとの回答をいただき、入職が実現しました。その際には、割愛を筑波大学が出し渋ったことを記憶しています。

専修大学に移られてからは、物静かながら、確固とした評価の高い教育者・研究者として、内外の尊敬の対象でいらっしゃいました。研究業績としてまずあげるべきは、八田達夫現政策大学院大学学長との共著、「年金改革論—積立方式へ移行せよ」(1999) 日本経済新聞社刊で、すぐれた経済書に与えられる日本経済新聞社図書文化賞を受賞されました。この著作において公的年金試算シミュレーションに利用された OSU モデルは、Osaka, Senshu University モデルの略であり、出版当時の筆者達の所属大学の頭文字をとったものです。OSU モデルは、厚生省以外ではとうてい不可能と考えられていた公的年金試算を一般の公的年金研究者に解放した画期的なモデルでした。そしてこのモデルはまさに公的年金研究の標準モデルとなり、その発展型は現在でも利用されています。また、研究に利用したモデルを単に公開するのみでなく、他の研究者による利用を可能とする画期的な公表形態の先駆的役割も果たし、学会に大きな影響を与えました。先生が亡くなられた 2 ヶ月後に筆者が共編著した「社会保障の計量分析」(2010) 東京大学出版会刊の発表会に参加した社会保障研究者達は先生を惜しむと同時に業績を称え、一連の研究と OSU モデルが公的年金研究の進展に不可欠であったと異口同音に認めていました。

先生は、国際的にも活躍され、長期在外研究員としてオックスフォード大学に在籍され、生産性やマクロ計量モデルの研究を行われました。オックスフォード大学ではコーヒーボーイがつく待遇を受けられていたことが記憶に残っています。さらに、長年にわたって、複数の国際機関を通じてシンガポールやマレーシア政府の生産性推計を指導されたり、JICA の専門家派遣でインドネシアやブラジル政府の政策分析用マクロ計量モデル開発を指導されたりしました。マクロモデル開発には筆者も参加し、現地で長い時間、貴重な共同研究の機会を得ることができ、自分の財産となっています。

学内では、社会知性研究開発センター・中小企業センターにおけるオープンリサーチプロジェクト「アジア諸国の産業発展と中小企業」の代表を勤められ、最終的に 9 巻におよぶモノグラフシリーズをまとめられました。プロジェクト参加者が多く、かつ参加者の興味がそれぞれ異なるベクトルを持つ困難なプロジェクトを収束させた功

績には頭がさがります。このプロジェクトでは先生をチーフとして、国際カンファレンスを毎年1回計4回ほど開催し成功させましたが、特に、国際交流提携校であるオーストラリアのウーロンゴン大学等と共同開催した第5回グローバル経済における中小企業・国際カンファレンス（神田校舎）は、多くの国際的参加者と優れた発表やディスカッションにより高い評価の成功を得ることができました。この国際カンファレンスは現在も専修大学共催で継続開催されており、昨年は中国で開催そして今秋はマレーシアで開催されます。ウーロンゴン大学には、先生と共に出張し、研究発表および共同研究の打ち合わせをしました。オーストラリアは干ばつだったのですが、我々の出張中は大雨で、一部では洪水被害が出るほどでした。2人でどちらが雨男なのかを話し合ったのも懐かしい思い出となりました。

教育者としては、商学部の経済関連カリキュラムの整理と充実、商学研究科科長として大学院改革案の作成に尽力されました。ファカルティーディベロップメントの好例である、複数教員による経済基礎科目の展開におけるテキストの統一と最終試験の統一を実現できたのも先生の協力があったからです。先生の教育に関するアイデアは、常に高い標準から発想を出され、自分の矮小な考えを反省させられることがしばしばありました。大学院改革案を実現することが困難だったことも事実ですが、改革の方向性を示していただき、改革案が将来において重要となることは間違いないと考えます。

先生は出身大学の先輩ですが、商学部では入職年次が逆転したことを冗談めかして、「ここでは君が先輩なんだから」とよくからかわれました。しかし、これは先生の愛情であり、先輩風をふかすのではなく、学問の同僚として目下のものにも接する人間の大きさだったと思います。もっとも、会議や講義で遅くなった時に、「寿司でも食いますか」とお誘いくださり、いきつけの寿司屋に行くことがありましたが、その時には先輩として振る舞われておごっていただいたことを告白しておきます。また、筆者がイタリアのシエナ大学で長期在外研究員として研究していた時には、奥様と一緒に仲良くシエナに立ち寄られました。中世の色濃く残るシエナの街を案内し、ご夫妻の絶妙な会話の受け答えを聞きながら、おいしいイタリア料理を食べました。シエナからフィレンツェに北上するとキャンティ地域というワインで有名な丘陵地帯があります。先生ご夫婦をドライブにお連れしたところ、車窓の風景がご出身の諏訪の風景に似ていると懐かしそうにおっしゃっていたことが記憶に残っています。シエナを案内したことで、少しでもお世話になった先生に喜んでいただけたのではないかと思います。

先生がなくなる少し前に、突然アメリカの経済学者から国際交流センターに先生の所在を問う電子メールが入りました。先生のバッファロー時代の同級生からでした。早速、先生にお知らせしたところ、大変仲の良かった友人の方で、彼とは大学院休暇中におんぼろ中古車を購入してアメリカ旅行を計画したが、あまりにもおんぼろでなかなか州を出ることができなかったという思い出をおもしろおかしくお話しくださいました。後日、この友人の方に先生の訃報をお知らせしたところ、先生の博士論文指導教官に連絡を取ってくださり、奥様におくやみの手紙が届いたと聞いております。少しでも奥様のご心痛が安らいだのではないかと推察します。国際交流センターに教員の問い合わせの電子メールが来ることはほとんどないことですし、それも先生が亡くなる直前という、奇跡的と言っても良いエピソードだと思います。先生の人を引きつける力が最後まで残っていらっしやったのではないのでしょうか。

先生が亡くなられたことは、単に専修大学のみならず、大げさではなく世界的な損失です。しかし、事実は受け入れなければなりません。先生が常に見守っていてくださることを意識して、高い標準をかかげ、商学部そして専修大学さらには経済社会のよりよい発展を期することが我々の使命であると考えます。先生のご冥福をお祈りいたします。